

日本文学名著  
日汉对照系列丛书

# 罗生

羅生門・鼻・芋粥・蜘蛛  
の糸・地獄変・河童

■大正文坛的彗星，横扫自然主义私人小说的狭隘颓靡。慨叹「恶」的无可回避、生的无奈与绝望；探索深层心理世界，思考生死抉择的极点，读后令你掩卷回味。

芥川龙之介

著

傅羽弘

译

吉林大学出版社



图书在版编目(CIP)数据

罗生门/(日)芥川龙之介著;傅羽弘译. —长春:吉林大学出版社, 2009. 3

(日本文学名著日汉对照系列丛书)

ISBN 978-7-5601-4051-3

I. 罗…—II. ①芥…②傅…—III. ①日语-汉语-对照读物②短篇小说-作品集-日本-现代—IV. H369. 4: I

中国版本图书馆CIP数据核字(2009)第045428号

日本文学名著日汉对照系列丛书

罗生门

- 
- |         |  |
|---------|--|
| ◎作者     | 芥川龙之介  |
| ◎译      | 傅羽弘  |
| ◎责任编辑   | 刘冠宏  |
| ◎责任校对   | 刘冠宏  |
| ◎封面设计   | 张沐沉  |
| ◎版式设计   | 孙明晓  |
| ◎出版发行   | 吉林大学出版社  |
| ◎社址     | 长春市明德路421号   |
| ◎邮编     | 130021   |
| ◎发行部电话  | 0431-88499826  |
| ◎网址     | <a href="http://www.jlup.com.cn">http://www.jlup.com.cn</a>    |
| ◎E-mail | <a href="mailto:jlup@mail.jlu.edu.cn">jlup@mail.jlu.edu.cn</a> |
| ◎印刷     | 长春市华艺印刷有限公司  |

版权所有 翻印必究

150mm × 230mm 16开 18印张 210千字

2009年08月第1版 2009年08月第1次印刷

ISBN 978-7-5601-4051-3

定价: 26.00 元

## 出版者的话

语言是为交流而生的。原始的人们，必是由于郁郁乎有感于心，岌岌乎有危及身，手舞之足蹈之而不达其意，便佐之以喉舌了。至于那有感于心的是爱是恨，有危及身的是兽是敌，我辈几万年后恐怕难以妄加猜测。总之，咿呀呼喝，渐成定式。以警以劝，极得其便；以歌以咏，曲尽其情。这便是今人所说的语言了。

而就古人的交流范围而言，不过是一个部族。因此，语言自诞生之初便是因部族而异的。至今，中国的少数民族地区仍然存在着隔山不同语过河非乡音的情形。此后，私财积，政权生，征伐起，海内一。于是，王权下的语言在不同部族间渐渐统一融合，语言的差异便主要体现在国家之间了。由于语言的不解，异邦之间感觉神秘，出现误会，甚至由无知而仇视。

解除外国人在本土人眼里的神秘、误解，当然需要交流。学语言，是交流所需。而学语言的过程本身，也是交流。最简单的问候语，往往是一国风土人情的缩影；名家的小说文章，则是欣赏美文和解读社会的阶梯。

日本与中国不过一苇可航之遥，文化交流源远流长。吉林大学是中国名校，日语教育素建伟勋。此次由吉林大学出版社组织出版的日本名著日汉对照系列丛书，既立意于促进日语学习，又便于大众欣赏日本名家美文，其意义深远。

本丛书选译了田山花袋的《棉被》，泉镜花的《高野圣僧》《歌行灯》，樋口一叶的《浊流》《十三夜》《青梅竹马》，岛崎藤村的《破戒》，森鷗外的《舞女》《山椒大夫》《高濑舟》，夏目漱石的《我是猫》《少爷》，芥川龙之介的

《罗生门》《鼻子》《山药粥》《蜘蛛丝》《地狱变》《河童》，梶井基次郎的《柠檬》《有城楼的市镇》《冬天》《冬天的苍蝇》《崖上的情绪》，横光利一的《蝇》《太阳》《头与腹》，堀辰雄的《起风》，川端康成的《伊豆舞女》《雪国》，大江健三郎的《万延元年的足球》等，都是日本自明治到现代有代表性的作家作品。

这些作家作品在创作思想上移风易俗，在表现技法上不乏创新。因而，有的语言表述悖于常规，有的用词艰涩语意叠积，有的意境微妙难以言传，给对译工作增加了不少难度。译者虽尽心努力，但水平所限，译文难免有不妥之处，还望读者指正。

吉林大学出版社

2009年8月

## 序言

芥川龙之介是日本大正时代小说家，自幼天资聪慧，广泛涉猎了江户文学、中国古典、日本近代作家的作品。同时，对欧美文学也兴趣浓厚，深受世纪末文学的影响。最终因健康和思想情绪上的原因，对现实与未来感到一种“茫然不安”，于1927年7月24日，在自家服用安眠药，结束了35岁的人生和12年创作生涯。因其生命及创作的短暂，故被称为“大正的彗星”。

芥川一生创作了148篇短篇小说。他的短篇小说取材新颖，情节新奇甚至诡异。作品关注社会丑恶现象，但作家很少直接评论，而仅以冷峻的文笔和简洁有力的语言来陈述，却让读者深深感觉到其丑恶性。这使得他的小说即具有高度的艺术性成为当时社会的缩影。1915年发表《罗生门》。后师事夏目漱石，深受影响。1916年发表短篇小说《鼻子》，之后又连续创作了《山药粥》、《手巾》，在文坛确立了新锐作家的地位。1918年他发表《地狱变》，反映了纯粹的艺术和无辜的底层人民受到的邪恶统治者的摧残。20世纪20年代，日本社会形势右转，军阀当道，没有言论自由，这使得他的作品更加压抑，如《河童》。这也是其选择自杀身亡的原因。

芥川的死给日本社会带来极大冲击，文坛人士更是惋惜其天才早逝，于是，在1935年，他的毕生好友菊池寛以他的名字设立了文学新人奖——“芥川赏”，现已成为日本最重要的文学奖项之一。

本书选译了芥川龙之介广为读者熟知的《罗生门》、《鼻子》、《山药粥》、《蜘蛛丝》、《地狱变》和《河童》等五篇作品。

《罗生门》以“罗生门”为特殊场景，描写了平安时代后期一个被主人解雇的佃户，为了生存而同命相欺、沦为强盗的故事。揭露了充满自私的人性。

《鼻子》讲述禅智内供因鼻长过颧而困扰，便想尽办法让鼻子变短，但依然被人嘲笑，最后恢复原形。文中融入了禅宗“三境界说”，指出“人类最终走不出命运的樊篱”，显示出芥川在人生体验中深刻的矛盾和痛苦。

《山药粥》的故事题材取自《今昔物语集》。有位五品侍卫，生活困苦无聊，竟以能够饱餐山药粥为愿。利仁将军，带其到岳父家赴宴。却因

为粥量太多，令其丑态百出。

《蜘蛛丝》是一篇佛经说理故事，多次入选日本中学教科书。讲述了印度有一个无恶不作的强盗键陀多本获得佛祖以蛛丝救助，却因贪念不绝而重入苦海的故事。

《地狱变》根据日本《今昔物语》第28卷中的一个故事及《宇治拾遗物语》中一段相似的故事改写而成。日本战国时期的画师良秀奉朝廷重臣堀川大人救命画一扇“地狱变”屏风，为此牺牲了独生女儿，自己最终悬梁自尽。小说反映了权贵的暴虐和芥川“艺术至上主义”的创作态度。

《河童》记述了一度进入河童国的“我”返回人世间，便陷入对人类无比嫌恶的烦恼之中，被视为疯子。作品河童中反映的作者的观念便是促使芥川龙之介最后选择以自杀终结自己生命的主要原因。

关于作品名称的翻译。“罗生门”实为七世纪日本皇都所在地平安京的都城正门——罗城门之误，后来皇室衰落，天灾内乱频繁，罗城门年久失修，成为一个残破不堪的城门。但译文依照惯例沿用原作品的名称；有的版本将《地狱变》译为《地狱图》，因为“变”字本指根据佛教所说净土与地狱的情状而绘制的图画，中日相通，因此本译本采用《地狱变》的译法；《河童》中的河童源自古中国黄河流域上游的“水虎”，又名“河伯”。“河伯”传到日本之后变成了“河童”。故依照原文翻译；而《芋粥》也有直译其名的，但日文中“芋”是马铃薯、红薯、芋头、山药的总称，而“芋粥”特指加入山药熬制的粥饭，故笔者认为《山药粥》的译法为当。

因考虑到日汉对照的要求，语句翻译尽可能保持了对应性，由此而影响了多种翻译方法的运用，请读者体谅。其中地名、人名等依惯例直译，事件、事物名称在不影响理解的前提下也采用直译，但是有一些略作改动，如《地狱变》中的“百鬼夜行”译为“百鬼夜游”等。另外，《河童》中有一段人鬼问答，即灵魂学协会出具的关于托克鬼魂事件的报告书。有版本以白话译出，笔者认为保持原作的文言体风貌为妥。

由于译者功底浅薄，只能译成抛砖之作，不妥与谬误之处恭请前辈、同好指正。

编者

2009年4月于长春

# 目录 I



罗生门·····	2
鼻子·····	16
蜘蛛丝·····	32
山药粥·····	40
地狱变·····	78
河童·····	160

日本文学名著  
日汉对照系列丛书

# 罗生

羅生門・鼻・芋粥・蜘蛛  
の糸・地獄変・河童

■大正文坛的巨匠、横沟  
自然主义短篇小说的桂冠  
扉 慨叹、悲、的无可回  
避、生的无奈与绝望、探  
索深层心理世界、思考生  
死抉择的契机、读后令你  
掩卷回味无穷

芥川龙之介

傅羽弘

吉林出版集团有限责任公司





## 羅生門

ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門ろしょうもんの下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかには誰もいない。ただ、所々丹塗にぬりの剥はげた、大きな円柱まるばしらに、蟋蟀きりぎりすが一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路すざくおおじにある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠いちめがさや揉鳥帽子もみえぼしが、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震つじかぜとか辻風つじかぜとか火事かじとか饑饉うせとか云う災わざわいがつづいて起った。そこで洛中らくちゆうのさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎ぶちいて、その丹にがついたり、金銀はくの箔はくがついたりした木を、路みちばたにつみ重ねて、薪たきぎの料しろに売っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸こりすが棲すむ。盗人ぬすびとが棲すむ。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代りまた鴉からすがどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪しびを描いて、高い鷗尾しびのまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻ごまをまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄ついばみに来るのである。——もっとも今日は、刻限こくげんが遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞ふんが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺あおの襖あおの尻しりを据えて、右の頬ほに出来た、大きな面皰にきびを気にしな

## 罗生门

某日黄昏时分，一个佃农在罗生门下避雨。

大门之下只有他一人，此外仅有一只蟋蟀趴在朱漆斑驳的门柱上。按说罗生门位于朱雀大街之上，来此避雨的还应该有两三个头戴竹斗笠或乌帽子的男女才对，然而却只有他一人。

若问为何人丁稀落，是因为近两三年里京都地方相继发生了诸如地震、龙卷风、火灾和饥荒等大灾难，致使洛中<sup>①</sup>破败不堪。据当时记载，佛像、佛具都被捣毁，人们将那些带着朱漆、金箔和银箔的木头堆放在路边当作柴禾出卖。洛中既已如此，那么罗生门的修缮事宜自然就无人问津，于是其破败也就日甚。这里便成了狐狸栖息之地，盗贼藏身之所，甚至人们惯常将那些无主的死尸抛弃在门楼之上。因此，每当夜幕降临，这里愈发阴森恐怖，于是便无人到罗生门周遭走动。

结果，这里便成为乌鸦的天下。日间，通常可见数只乌鸦在鸱尾<sup>②</sup>附近鼓噪、盘旋。尤其当罗生门上空出现火烧云的时候，满天昏鸦有如红布上洒落的点点黑芝麻一般。当然，乌鸦是来啄食腐尸的。然而不知为何，今天却无一只如期造访，只有在塌落的阶石上随处可见的白色鸦粪，而且阶石的缝隙间已是杂草丛生。那佃农垫着蓝布外套的下摆坐在七层石阶的最上方，外套已经洗得褪了颜色。佃农的右脸上生着一个很大的粉刺，他一边忍受着隐隐的痛楚，一边茫然地凝视着飘落的雨水。



①京城（今京都）内。

②古代宫殿屋脊正脊两端的装饰性构件。外形略如鸱尾，故称。

がら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと言う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微<sup>さいび</sup>していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と言うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と言う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalism に影響<sup>きやう</sup>した。甲の刻下<sup>こくさ</sup>りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り<sup>あす</sup>明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと言う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍<sup>いらか</sup>の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる違<sup>い</sup>はない。選んでいれば、築土<sup>ついで</sup>の下か、道ばたの土の上で、饑死<sup>うえじ</sup>をするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまうばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊<sup>ていかい</sup>した揚句<sup>あげく</sup>に、やっとこの局所<sup>ぼうちやく</sup>へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人<sup>ぬすびと</sup>になるよりほかに仕方がない」と言う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏<sup>くさめ</sup>をして、それから、大儀<sup>たいぎ</sup>そうに立上った。夕冷え

笔者上文说道“一个佃农在罗生门下避雨”，其实，即便此时雨停下来，佃农也无处可去。若在以往，他应该是回到主人家里去的，可早在四五日之前雇主已将他解雇。前文交代，此时的京都已是破败不堪，这个佃农之所以被多年的雇主解雇，无非是受到这种破败的波及。因而，与其说是“一个佃农在罗生门下避雨”，倒不如说是“流离失所的佃农被雨所困”更准确。况且今天的天气也影响到这个平安朝佃农的Sentimentalism（情绪）。申时<sup>①</sup>开始下的雨一直没有停下来的迹象。对这佃农来讲，目前最要紧的就是考虑明天的生计——说起来那无非是在绝望之中找寻希望，他茫然地思来想去，对朱雀大街上传来的雨声也似听非听。

大雨席卷着罗生门，雨声由远及近地袭来。暮霭越发深沉了，抬头望去，夜空低垂，罗生门斜脊上的鸱标仿佛会触及到灰暗的浓云。

因为是在绝望之中找寻希望，这佃农自然也就没有选择余地。如果选择，唯有选择饿死于墙下，倒毙于路旁的份儿，而后就像死狗一样被人扔在门楼之上。如果不做选择——佃农的思绪反复在同一思路徘徊，最终还是回到这不做选择的想法上来。可是，“如果”终究是“如果”，佃农对自己所做出的“不做选择”这一决定是抱着肯定态度的，同时，他自然就拿不出勇气来积极地认可自己今后“只好去做盗贼”的命运，并以此给这“如果”一个聊以自慰的解释。

佃农打了一个大大的喷嚏，而后有气无力地站起身来。京都那袭人的晚凉，叫人恨不得要点上火盆来取暖。暮霭中的冷风从门柱之间肆无忌惮地吹进来。此时，起初趴在朱漆门柱上的蟋蟀已了无踪影。

① 下午3时整至下午5时整。

のする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまっていた蟋蟀も、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗疹に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晚樂にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出るだけ、平にしなから、頸を出るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと

佃农穿着隶棠色的黄汗衫，外套一件深蓝便服。他缩着脖子，肩膀耸得老高，往罗生门的四下察看。因为他巴望着找到一处暂且可以安歇一宿的所在，那个所在最好既不受风雨袭扰，又可避开别人的眼目。说来也巧，果然有一只朱漆斑驳的梯子映入他的眼帘，那梯子很宽，直通罗生门的顶楼。想必那楼上即便有人，也只是一些死尸罢了。想罢，佃农使用手护住挎在腰际的木柄长刀，使刀身不至于从刀鞘中滑落出去，而后抬起他那穿着稻草鞋的脚踏上梯子的第一阶。

数分钟之后，在通往罗生门顶楼那宽宽的梯子中段便浮现出一个男子的身影，他像猫一样躬着身子屏住呼吸窥视楼上的情形，楼上映出的微弱火光照射在他右侧面颊上，并且正是透过他的短发可见那红肿粉刺的一侧。起初，佃农本以为楼上是只有死尸的，可是当他爬上两三级楼梯一看，却发现有人在点着灯火，而且那灯火还四处移动着。昏黄的灯光摇曳着，光亮映照在布满蜘蛛网的天棚上边，佃农因此断定确有人在。在这样的雨夜来到罗生门上明火之人，一定是来者不善。

佃农不敢发出声响，像壁虎一样轻手轻脚地沿着陡峭的梯子攀爬，终于爬到最高一级。接下来，他尽可能地伸直了身子，又尽可能地伸长脖子向楼内窥望。

眼前的情形果然如传闻所讲，楼内胡乱地扔着一些死尸。灯火所及的空间比想象的还要窄小，至于总共有多少具尸体却无法知晓。依稀可以知道的便是既有裸尸，也有穿着衣服的。当然，那些尸体是男女混杂在一起的。而且，所有的尸体都如泥人一般张着大嘴、伸着手臂，横七竖八地躺在地板上，以至于令人怀疑他们是

云う事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくらがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾の如く黙っていた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲っている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云っては、語弊があるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、餓死をするか盗人になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつ

否曾经有过生命。而且，昏暗的灯光照射在尸体的肩与胸等隆起的部位，使得低矮的部位更加黑暗。同时，死者有如哑巴，永远不会再发出声音。

腐烂的尸体臭气熏天，佃农下意识地伸手掩住自己的鼻子。但是，接下来的一瞬间，他放开了那只掩住鼻子的手，因为一种强烈的情绪使他完全无暇顾及嗅觉了。

那一刻，佃农才发现有一个人蹲在尸堆里。那是一个穿着柏树皮颜色衣服的老妪，她身材矮小、瘦骨嶙峋、满头白发，形似一只猴子。老妪手持照亮的松明，专心地注视着一具死尸的脸，从长长的头发来看，那多半是一具女尸。

佃农怀着六分恐惧四分好奇，一时间几乎停止了呼吸。借用旧时记者常用的说法，那种感觉就是“毛骨悚然”。他看到老妪将松明插进地板的缝隙里，而后双手伸向她一直注视着的女尸头部，恰似母猴给小猴捉虱子一样，一根一根地开始揪女尸的长发，毛发随着她手的动作被拔了下来。

随着女尸的头发被一根一根地拔下，佃农内心的恐惧也一点一点消失。而且，与此同时，一股对那老妪的强烈憎恶感开始在他心中生成，不，单说是对老妪的憎恶似乎还不够准确，而是对一切罪恶的反感分分秒秒地强烈起来。此时，方才在罗生门下思考过的是选择饿死还是偷盗的问题再次袭上佃农的心头。若问是什么令他又生此念，恐怕就是起初他那毅然选择饿死的决定使然。佃农憎恶罪恶之心有如老妪插在地板缝隙里的松明之火熊熊燃烧起来。

诚然，佃农并不明了老妪为何要揪掉死人的头



た。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さっきまで自分が、盗人になる気でいた事なぞは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄ひじりづかの太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩いしゆみにでも弾はじかれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸のしにつまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞ふさいで、こう罵ののった。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭ねじ倒した。丁度にわとり、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘さやを払って、白い鋼はがねの色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球めだまが眶まぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、唾のように執拗しゆうねく黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後あとに残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。